

## 二つの「NO NUKES」に込められた思い

—震災によって奈良美智が見出したもの—

那須 千浩

はじめに —二つの絵—

まず、はじめに、右の二つの作品を見てもらいたい。この二つの作品が同じ作家によって描かれたものかどうか。別の作家が同じテーマについて描いたもの、と言われてもおかしくないと思う。



しかしこの二作品は、同一の人物が描いたものなのである。この作品を描いたのは、青森県弘前市出身のポップアート作家、奈良美智である。奈良は、動物やにらみつけるような目つきの女の子をモチーフにしたドローイングや、アクリル絵の具による絵画で知られている。“いわゆる奈良美智の作品”といえば、左の絵のような鋭い目つきの女の子を思い浮かべる人が多いだろう。

しかし彼の最近の作品は、それとは異なった、右の絵や下の「春少女」のようなものに変化しており、素人目にも分かるくらい、はっきりとした雰囲気の違いが感じられると思う。奈良の絵を変えたもの、それは東日本大震災であった。



「春少女」

2011年3月11日に東北で起こった震災によって、大勢の犠牲者が出た。家を失い、家族や大切な人を亡くした人が大勢いる。映像に映る、津波が町を飲み込んでいく様子はただただ衝撃で、自然の恐ろしさと人間の無力さを感じるばかりだった。

奈良美智もこの地震を受けて、「すごい虚無感と自分の無力さ。自分は何ができるんだろう？何もできない……白いキャンバスに、筆で絵を描

くなんてできない。そんなことして何になるんだ。」<sup>1)</sup> と思った、と語っている。奈良は震災後、筆や鉛筆を持つことができなくなり、絵を描けなくなったという。そんな奈良が、再び筆を取り震災後初めて描いた作品のひとつが、右の作品である。

震災は奈良にどのような影響を与え、どのような思いを抱かせたのか。2つの絵に共通して描かれている「NO NUKES」への思いは変化したのか。また、それぞれの絵に込められているメッセージは何なのか。奈良美智の2つの絵から、震災が作家に及ぼした影響、そしてそのことによる作家の変化について考察していきたい。

## アートの意義と「NO NUKES」

震災が起こり、多くのパフォーマーやアーティストが自分の存在意義を問い直したのではないかと思う。奈良美智も、「あのとき、自分は何ができるかと考えたら、人として何かはできるけど、美術は即効性のあるカンフル剤のようなものではないと痛感した。」(p34)<sup>2)</sup> 『「アートで何ができるのか』ってみんなが言い始めたときに、自分自身は何もできないと思った。」(p35) と語っている。震災後は筆や鉛筆を持つことができなくなり、絵を描けなくなったという奈良美智が、再び制作に向かえるようになったのは、「ささやかな日常の中で、やはり美術は必要とされるんじゃないかって実感できたから」(p35) という。



奈良は、震災後の復興を終えてリニューアル・オープンすることになっていた水戸芸術館でのグループ展への参加を予定していたが、無気力な気持ちで何を出していいかわからない状態であった。そんなとき彼が起こした行動は、家の中にあるものを集めてみる、ということであった。そうしてみると、並べられている変な人形や、見捨てられたようなものたちにすごい力を感じ、身の回りの何気ないものから非常に勇気をもたらったということである。こうして震災後初めて作り出された作品が、「命」を記す女の子(上図)<sup>3)</sup>と「NO NUKES」の紙を持っている女の子の絵であった。

「NO NUKES」のNUKEというのは、核兵器や原子力発電所、核エネルギーといった意味であり、「NO NUKES」という言葉は、反原発などのメッセージやスローガンとして用いられることが多い。

震災が起こり、反原発のデモが各地で起こる中、毎週金曜日の夕方、大

飯原発の再稼働に反対して行われた首相官邸前の反原発デモには、奈良の絵をプリントしたプラカードを掲げる参加者が大勢いた。「NO NUKES」と書かれた紙を女の子が持っている絵は、たくさんのプラカードがひしめくなかでもひとときわ目を引き、「まるで参加者の気持ちを代弁するかのような子どもたちの行進が胸を打つ」(p102)情景であったようだ。

しかし、この時使われた作品は、震災を受けてから奈良が描いた作品ではない。デモに使われたのは、先ほどの二作品のうち左の、1998年に描かれた作品である。少女が「NO NUKES」と描かれた紙を持っている、という点では共通するものが描かれているにもかかわらず、デモに使われたのが震災後の作品ではなかったという点は興味深い。

震災後に奈良が描いた作品は、明らかに福島原発事故を受けて描かれた作品であり、デモも当然、福島原発事故をきっかけに起こったものであるため、少女の持つ「NO NUKES」への思いと、デモを起こした人々の思いは、まさにリンクするものと思われ、震災後の作品がデモに使われる方が自然であると考えられるのではないだろうか。しかし、実際に反原発デモに使われたのは、震災後の作品ではなかった。

なぜデモには、震災よりもっと前の作品が使われたのだろうか。

## 震災前の絵に込められた思い — 表層 —

これに対しては、いくつかの理由が考えられる。まず一つ目に、震災以前の作品が以下に述べるように、既にデモに使用された歴史を持っており、知名度が高く、簡単に手に入れられたのではないか、ということである。

この作品は、もともと奈良の知らないところで、タイのバンコクの反核デモに使われていた作品であり、その映像をみた日本人が今回のデモにまた使い出した、という背景をもっている。ある人が、奈良にTwitter上で「これは使ってもいいのだろうか？」と尋ねたところ、奈良は「それで商売をしなければ自由に使ってください」と答えた(p41)。そして、この作品をプリントしたものが、コンビニのコピー機で簡単に手に入るようになり、今回の反原発デモに使用されることとなったのだ。

一方、震災後に描かれた作品は、デモが起こるまでに世に出ている期間が短く、人の目に触れる機会が限られていたため、デモに参加するような人でも、このような作品があることを知らなかった、ということは十分考えられる。こういった背景から、デモに使われた震災以前の作品のほうが、多くの人々の目に既にとまっていたばかりでなく、反核のデモに使われていたものとして認識されており、なおかつ手軽に手に入れられたため、震

災前の作品がデモに使用されたのではないだろうか。

しかしもう一つ、私がさらに重要であると思う理由がある。それは作品のインパクトの違いだ。二つの作品のうち、どちらか一つをプラカードに掲げてデモに参加しようということになったら、どちらを選択するだろうか。おそらく大多数の人々が、震災以前の作品を選ぶのではないだろうか。

震災以前の作品は、“いわゆる奈良美智の絵”、というイメージ通りの作品であると思う。鋭い目つきをした女の子、ポップな色使い、強いメッセージ性。このうち、鋭い目つきの女の子というのが、やはり奈良美智作品の最大の特徴であり、魅力であり、代名詞ともいえるだろう。震災前の奈良の作品には、このような女の子が数多く登場する。だが、作品の中の女の子は、ただこちらを見つめているというわけではない。女の子は、確かにこちらを見ており視線も合うのだが、そこには拒否や拒絶といったものが感じられる気がする。

デモに使用された作品の女の子も、鋭い目つきで「NO NUKES」と描かれた紙を持ち、こちらを睨みつけてくる。しかし、こちらに救いを求めているというわけでは、決してない。女の子は、喜びはもとより、悲しみや悔しさなどといった感情もすべて押し殺し、こちらに何か強く訴えかけてきているように見える。それは、一方的に意見することを目的とし、相手の意見には耳を貸すことを拒否しながら、反発の気持ちを全面に押し出す、デモという行為に通じるところがあるのではないだろうか。そのために、タイの反核デモにも日本の反原発デモにも、奈良の震災前の作品が人々の間で自然と使用されるようになったのではないだろうか。

奈良はこの絵に関して、「僕はそれをデモに利用しようとか、何かのスローガンにしようとか、具体的な行動をまったく思い描いていなかった。日常の中で感じることの一部として自然に自分の内側を描いたんだ。」「NO NUKES の件は、作者不在の強さ、僕自身がいなくても大丈夫なことに気付かせてくれた」(p41)と語っており、自身の作品がデモに使われたことを、新鮮なこととして受け取っているように感じる。

この作品は、「NO NUKES」と描かれていることから、一見強い政治性を帯びているように思われるが、本人も語っているように、他の作品と同じように「日常の中で感じることの一部として自然に」描かれたものであり、奈良美智自身に「反原発」を声高に叫ぼうという気や、そういった強い政治性やメッセージ性を込めた作品を作ろうという気持ちがあって描かれた作品ではないのだろう。

奈良は、震災前の自身の作品について、「今までは、描いているものの

表層だけをみんなに見せていて、そこに至るプロセスは見える人だけに見えればいいと思っていた…だからイメージを観念的に捉えられて、カワイイとか目が怖いとか言われることも多かった。」(p38)と語っている。震災以前の奈良は、登場する人物の気持ちや作品の背景といったものよりも、表層に見えるインパクトを重視して作品を描いていたようである。震災前の彼の作品は、分かりやすい。ポップな色使いで目を引き、鋭い女の子の視線が社会に反発する気持ちとリンクする。震災以前、奈良は、人々が理解しやすい部分を切り取り、分かりやすく表わすことを最も意識して作品を描いていたのではないだろうか。それゆえに、当時の彼の作品は非常に強いインパクトがあり、それが、彼の作品がデモに使われた、一番の要因だったのではないだろうか。

## 震災後の絵に込められた思い 一切実さー

では、それに対して、震災後の絵はどのようなメッセージやインパクトを持つのであろうか。

震災後の絵の中の少女は、震災前の少女とは対照的で、斜め下を向いており、こちらと目が合わないだけでなく、どこを見て何を見つめているのかも分からない。あるいは、何も見ていないのかもしれない。

この絵を最初に見たとき、私の目には女の子が遺影を持っているように映った。少女の悲しげな表情、紙を胸よりやや下に力なく抱く姿…それは親しい人を亡くし、悲しみに耐えながら遺影を持つ遺族の姿に重なって見えた。もしかすると女の子の視線は、死者に向けられた視線なのではないだろうか。死者のことを強く思うのだが、見つめる対象となる人はもういない。端から見たら、どこに向けられているとも分からない視線は、すべて死者に向けられているのではないだろうか。

では、彼女の見つめている死者とは具体的に誰なのだろう。この絵は震災後に描かれたものであるので、震災で亡くなった犠牲者なのかもしれない。しかし、それだけではなく、この作品にはもっと大きなメッセージが含まれているような気もする。

少女は「NO NUKES」という紙を持っているが、原発反対という気持ちをこちらに全面に押し出しているようには見えない。少女はただ反発するだけではなく、目には見えないが、もっと深い思いを胸に秘めながら紙を持っているように感じる。震災が起これば多くの人の命が奪われたことへの悲しみ。津波を前に為す術もなく町を奪われた無力感。安全といわれていた原発から放射能が漏れるようになったことへの当惑。放射能の危険から逃れ

る為に慣れ親しんだ土地を離れなければならなくなった人々のいたたまれなさ。原発は危険なもので撤去するべきであるという声が大きくなる中、原発に関わり、それによって生かされている人もいるという矛盾…まだまだ挙げていったらきりがないほど数え切れない複雑な思いを、見る側に絵の中に読み込むことができる作品なのではないだろうか。

奈良は震災後の自身の変化について、「震災後の制作を通して、もっと世界は複雑だろう、絵は複雑だろう、すぐ簡単になるなよって言葉が自分の中に湧いてきて、いらぬものをそぎ落としてみたら、本当に必要なものが増えていた」(p39)といい、それを「震災後は、いろんなことがひとつの方向へと直結し出した。そこで浮かんだキーワードが『切実さ』。」(p61)という言葉で語る。

『切実さ』の意味は、問われても答えられない。答えられないからこそ、その『切実さ』のために制作しているのだ。それは、食うためではないことは確かだし、楽しむためでもないことは確かだ。なんとなくではあるが、生きていることを実感するために、今この世にこの時代に自分があることを、自分自身で確かめるために…いろいろと手を尽くし、その答えを生きているうちに手にしたい、命が果てるまでには必ず手にしたい、というような行動可能な残り時間に対する切実さというのが一番近い気がする。<sup>4)</sup>

ここからは、「切実さ」という、言葉では表しづらいものの意味を必死に求め、表現しようとしている奈良の姿勢がうかがえる。

震災後の奈良の作品からは、実際に経験した人や限られた人にしか分からないような、複雑に絡まった「切実な」思いが感じられる。それはやはり、作者自身が震災を実際に経験して被害を目の当たりにし、言葉では語り尽くせない人々の思いや気持ちを、必死に絵に表現しようとしたからではないだろうか。

震災後の奈良の絵は、ぱっと見たときの印象やインパクトは弱い。しかしそこには、簡単には表せないような、複雑で「切実な」思いがあるように感じる。それは、作者自身が「世界はもっと複雑だろう」と考え、自分が、今、ここに生きている意味を深く追求し、複雑で表しがたいものから逃げずにきちんと向き合い、絵に込めて人々に伝えようとした結果であろう。表面的なインパクトは弱くても、絵を描くということに対する思いや、作品に込められたメッセージは、震災後の絵の方がずっと強いのではないだろうか。

## おわりに —震災から見えた大切なもの—

奈良は「震災後、みんなが思う僕のイメージのような作品が許せなくて、もう2度と描けないかもしれないとすら、本気で思っていました。」<sup>5)</sup>と語っている。みんなが思う奈良のイメージのような作品というのはつまり、自分や絵の表層しか見られないことがない作品、ということであろう。

それに対して、震災後に自身が描いた作品については、「初めて体温を感じさせる絵が描けたと思う。今まではただの平面でしかなかったものが鑑賞者に作品の熱や温度のようなものが伝わる感じになった。」(p38) という。

そのような「体温」を感じさせる作品に、先に紹介した「春少女」という作品がある。この作品は、「NO NUKES」の紙を持つ少女の作品の少し後に描かれた絵であり、女の子の目は虹色に輝いている。しかし、ただ輝いているだけではなく、少しぼやけていて、まるで涙でにじんでいるようにも見える。全体的な雰囲気もとても優しく、まさに「温かさ」や「温度」が感じられる作品であると同時に、様々な思いをそこに見ることができる絵である。

奈良は、震災後に描いた作品を「近代への精神的な回帰を目指した作品」と表現している。

もともと僕は近代的なものに一番影響を受けてきたはずだったのに、それをおざなりにして、今しか見ていなかった自分への反省がすごくありました。現代の作家は…目に映る表層的な部分での変化は多いけど、精神力では近代を超えられていないと思います。今年の震災が起きたあと、みんな自分にとって本当に大切なものは何だろうって考えたと思うけど、僕にとってもあらためて大切なものを考えるきっかけになったのがあの震災でした。<sup>6)</sup>

震災は奈良に多大な影響を与え、その作品制作に対する思いや、作品の雰囲気までも変化させた。奈良は「今の絵は、ひとつの感情を見せるのではなく、見る側に感じさせようとしている。」(p49)と語っている。

奈良の「もっと世界は複雑だろう」という思いは、どれだけの人に伝わっているのだろう。「表層」を映し出すことから、「切実さ」「複雑さ」「体温」などといった、言葉では表しづらい、心の内面や葛藤をも表わそうとするものへと変化した、奈良の作品。彼の作品の変化をどうとらえるかは人それぞれであると思うが、作品と対峙し、そこにどんな思いがあるのか

考え、自分のものとしてとらえることは、きっと意味のあることで、これからの自分のあり方や、日本のあり方へのヒントを与えてくれているような気がする。

## 注

- 1) 「奈良美智 震災をこえて“描きたい”」2012年8月15日放送。詳細は『NHK ONLINE@首都圏』ホームページ  
<https://www.nhk.or.jp/shutoken/ohayo/report/20120815.html>
- 2) 『美術手帖(特集 奈良美智 原点回帰)』美術出版社2012年9月号より。  
この号には奈良のロングインタビューや荒木経惟との対談のほか「ブロンズ彫刻の創作現場レポート」「世界に立ち向かうNO NUKESガールたち」などの記事がある。本文中に(p\*\*)と記した引用はここからのものである。
- 3) 《2011年7月の僕のスタジオから/水戸での展示を經由して2012年7月の横浜へ》の作品の中の一部。
- 4) 奈良美智『ナラ・ライフ 奈良美智の日々』2012 有限会社フォイル p230
- 5) CINRA.NET インタビュー2012.8.1。トップページは  
<http://www.cinra.net/interview/2012/08/01/000000.php?page=1>
- 6) 注5に同じ

もともと奈良さんの作品が好きで、その奈良さんが描いた「NO NUKES」が反原発デモに使われていた、ということを知って、今回のテーマに選んだのですが、震災後の奈良さんの絵は、“いわゆる奈良美智”らしくない絵に思えてしまい（やっぱり私も表層だけ見てカワイイと思っていたのだと思います）、少し寂しいような気もしていました。

しかし、文章を書き進めていくうちに、奈良さんが“絵を描く”という行為に込めている思いの強さを知り、作品の中にも彼の「切実な」思いや割り切れない葛藤、それでもいろいろなものを乗り越えていこうとする希望のようなものを感じられるようになった気がします。以前よりも、もう一歩深い次元で奈良さんの作品が好きになったと同時に、アーティストや文化といったものが持つすごさや大切さを改めて感じることができました。

この授業を受けて、一番よかったと思うのは、文章を書くということがとても楽しいと思えたことです。それも、先生に相談に乗っていただいたり、授業をとっている他の仲間の文章や考えに触れることで刺激を受けたところが大きく、本当にこの授業を受講してよかったと思っています。

那須千浩